

絶対いのち (マルコ 11:12-25)

もしカレーライスを作るために一生懸命頑張ったのに、そこにカレーが入ってないとなれば、それはもはやカレーではありません。頑張ったかいなどは全く見ることはできません。私たちが人生を生きる時にも自分なりに懸命に真面目に生きたつもりなのに、人生に一番大事な中身が欠けていたら、なんとむなしいことでしょうか。これこそが今日の聖書に出ているイスラエルの姿そのものでした。イエス様はめったに怒られたりすることはありませんが、今日の聖書を見ますと、2回も怒りを露わにされる場面が紹介されています。まずは空腹にあっていちじくの木に実を求めましたが、葉っぱばかりで実が見つからなかったため、そのいちじくの木をのろわれました。弟子たちは「おかしいなあ。今いちじくの実がなる季節、時期じゃないのになんであんなに怒られるのか」と思っていました。それからエルサレムに着いて神殿に入ったときに、その神殿の中で商売ばかりしている姿を見て怒りを露わにし、神殿を掃除して商売をしている人々を追い出してしまいました。そこで律法学者、パリサイ人たちは、それが自分たちの利益のためにとっても大切なものだったのに、そこにメスを入れるようなことだったので、このまま放っておくわけにはいかない。どうしたらあのイエスを殺すことができるか、ということ相談していたということが書いてあります。その帰りにイエス様がのろわれたいちじくの木が実際枯れているのをペテロが見て「イエス様。あなたがのろわれたあの木が今こういうふうになりました」とビックリしてお話をしたら、イエス様は「信仰をもって祈るとそういうことはあり得るものなんだ。あなたがたはこれからその祈りによって死んでいる現場を生かすべきものなんだ」という意味でのお話をしなさいました。なぜイエス様はいちじくの実がなる時期ではないのに実を求めていたり、それをのろわれたりしたのでしょうか。これはいちじくの木の話ではありません。いちじくの木はイスラエルを象徴するものなのです。なので、今日のこの聖書の箇所を通して、つまりイエス様が怒りを露にしたということを通して、私たち人間にとって一番大切なこと、言葉を変えますと、神様の方から怒りを露にするということは、一体何がポイントなのかということを確認していきましょう。

1. 人間の最高の課題は、いのちの回復にある。

まず第一に、人間の最高の課題はいのちの回復にあります。いろいろ大事なことがたくさんあり、またこだわることがたくさんあります。しかし、それは生きるために必要なものかもしれません。しかし、人間にとってたとえそれがなくてもこれは絶対というのは神様から与えられた人間だけに許されているいのちなのです。犬や猫のようなものではないのです。肉のいのち、生命というものは動物にはみな許されています。しかし、人間だけにもう一つのいのち、神様との関わり、神様と一つになって、神の代わりにこの地球を治めて神の栄光を表すことができるために許されているいのちというものがあります。神様ご自身が人間の内側にともおられ、人間は自分の力ではなくて、その神の力によって、そして神の品性によって生きるように造られたものなのです。このいのちを失うことになりました。

1) 創世記 1:27-28、3:1-4、エペソ 2:1-3

創世記 1:27、28 を見ますと、人を造るときに神のかたちに造られたと言われています。人間だけが神に似たものに作られているのです。つまり、霊的な存在です。だからこそ生めよ、増えよ、地を満たせよと言うふうに祝福を与えられることができました。犬や牛や羊には生めよ、増えよ、地を満たせよ、地を従えよ、というような祝福は全くありません。人間だけに許されています。なぜなのでしょう。人間だけに神のかたちが与えられていのちが与えられているので。しかし、残念ながら創世記 3:1-4 を見ますと、目に見えない悪魔サタンに惑わされて、神を離れて、神様との契約を破って罪を犯してしまいました。その結果、神様がおっしゃ通りに、これを食べると必ず死ぬと言われた通りに死んでしまいます。たましいが死んでしまいます。いのちを失うことになります。それでエペソ 2:1-3 にその様子が詳細に記されています。人間は自分の罪と罪過によって死んでいたものであって。魂が死んだままの状態になり、なので自動的に。空中の権威を持つ支配者、目に見えない悪魔サタンに支配されて従って、悪魔サタンが好きなことをするしかありません。世の流れに流されるようにならざるを得ません。偶像崇拜が当たり前の本能になってしまいます。それで 3 節には生まれながら神の御怒りを受けるしかない子として生まれると言われ

ています。これがいのちを失った結果なのです。このような状態で成功を収めたとしましょう。それが本当の成功なのでしょう。このような状態で一時的に家庭が安定して、そこで笑いが絶えなくなったからといって幸せと言えるものなのでしょう。爆弾を抱えているわけなのです。いのちを失ったということは、この世に生まれるすべての人は爆弾を抱えて生きることなのです。それも知らずに少し裕福になれば、まあ happy かなというふうに勘違いしたり、それで生きていくのがこの世というところなのです。カレーもないのにカレーライスだと勘違いして喜んでるのが、この世を生きる神を離れている人々なのです。いのちより大切なものはありません。いのちを失うとすべてが失われるだけではなくて、天国から地獄に切り替わるようになるものなのです。これがいのちです。だからレムナントのときから、お父さん、お母さんが優しいかどうか、友達が私を認めてくれるかどうか、成績がどうなのか、それにもものすごくデリケートなのでしょうが、その前にいのち、いのち、いのちという言葉にこだわるようにならないといけません。そうでないと教会に通っていても道はずれになってしまうのです。いのちより大切なものはありません。しかし、そのいのちを失ってしまったので、神様は愛をもって人間にいのちを回復する約束をされます。

2) いのちの契約-創世記 3:15

その約束が創世記 3:15。女の子孫が生まれて、このいのちを奪った元凶である悪魔の頭を踏み砕くと約束されました。この約束にのみ、いのちの回復があるわけです。だから、この約束は何より大切なものであり、優先すべき内容です。絶対なのです。

3) イスラエル(Ab)、出エジプト、荒野、カナン、律法、祭り、幕屋、神殿

それで神様はこのいのちの回復、つまり女の子孫が蛇の頭を踏み砕く、この約束のためにアブラハムを召されてイスラエルという国を作られました。アブラハム、イスラエルという国は何のためにでしょうか。いのちを回復するために。わかりますか。それからモーセを通して 400 年間、エジプトの奴隷になっていたイスラエルの民をそこから助け出して出エジプトさせました。何のためにでしょうか。いのちの回復のためです。創世記 3:15 を成就させるためです。わかりますか。それでイスラエルの民を荒野を歩かせて昼は雲の柱、夜は炎の柱。また、うずらやマナなどを食べさせながら、荒野で奇跡を見せながらイスラエルの民を導かれました。何のためにでしょうか。いのちの回復の約束のためです。それから、イスラエルの民を約束の地カナンに導き入れられました。なぜカナンにイスラエルを導き入れられたのでしょうか。そこの先住民を全部追い出してイスラエルの国の土地にしてくださいだったので。なぜでしょうか。いのちを回復するためです。そのためにカナンに入ったイスラエルの民に、神様は律法を与えられました。この律法をしっかりと守りなさいよと。なぜ律法を与えられたのでしょうか。創世記 3:15、女の子孫が蛇の頭を踏み砕く、この約束が成就するためです。いのちの回復のためなのです。守るか守らないかを見極めるためではありません。それから、年に一度、必ず過越の祭りを守りなさい。初穂の刈り入れの祭りを守りなさい。収穫祭を守りなさい、というあらゆる行事を命じられました。何のためにでしょうか。日本の祭りのようなわあわあとするためのものなのでしょうか。いのちの回復のためです。この過越の祭りを、五旬節祭りをしっかりと守りなさい。それから、幕屋を作るように詳細に神様が指示をなさって、その通りに幕屋を作って、その幕屋が結局神殿に変わりました。なぜ幕屋を指示して神殿が作られるようになったのでしょうか。創世記 3:15。女の子孫が蛇の頭を踏み砕くことのために、失われたいのちの回復のために神殿も幕屋も神様は指示なさったわけです。それほどいのち、そしていのちの回復は絶対なのです。神様のすべての理由であり、目的なのです。

4) 選民の自負、律法への熱心、神殿での行事や奉仕

なのにイスラエルは、イスラエルの民、私たちが選ばれたという自負を持ってイスラエル以外の異邦人は獣だと思いながら、イスラエルという民はありますが、そこに一番大事ないのちは抜けてしまいました。わかりますか。いちじくの葉を見て、そこに実がないということを見てのろわれたというのは、いま実がなる時期でないのにそうされたというのは、いま実がなる時期なのかどうかではなくて、イスラエルなのに、いのちのために召された神の民、契約の民なのに、そこにいのちが抜けているからです。それをのろわれたという意味なのです。それからイスラエルは神の律法にもものすごく熱心でした。律法を守ろうとして、神様が与えられた律法プラスそこにもっと細かく、自分なりにしっかりと守るためにいろいろ

な項目を付け加えていたわけです。そうしてまで律法をとにかく守ろう、守ろうとして命懸けで熱心でした。律法を守る熱心はあるのに、そこにいのちが抜けているのです。創世記3:15の女の子孫が抜けているわけです。キリストが抜けているのです。それからイスラエルの民は神殿でのさまざまな行事を命懸けで守っていました。それで神殿で神様から言われたさまざまな方針などに命懸けで熱心がんばっていたわけなんです。しかし、イエス様はなぜ神殿で怒りを露わにして全部追い出して掃除をしたのでしょうか。それは単に商売をしているからではなくて、そこまでそうってしまった裏には何かあるかという、神殿にあれほどこだわっているのにいのちが抜けているのです。神殿はいのちのために許されているものなのに、いのちが抜けていて偶像の建物になっているだけのものだったのです。それでイエス様は神殿に入っているいのちが欠けているその神殿を見て、怒りを露わにしました。それはいのちが欠けているだけでも大変なのに、裏返しますといのちのためのものなのに、いのちが欠けると、それにものすごくこだわられるようになるので、逆にいのちに対してものすごい妨害、邪魔になるでしょう。そういうことでイエス様はいちじくの木を見て怒りを露わにして、神殿に上られて怒りを露わにされました。

5) 創世記3:15(いのち)が欠けている熱心-捕虜、植民地

この創世記3:15、いのちが欠けている熱心というものの結果、イスラエルは捕虜にされてしまったり、植民地になってしまったり、全世界に散らされる悲しい歴史を辿ることになってしまいました。なので、このイスラエルの歴史そのものを今日の聖書を通して、イエス様は一言でそれを指摘していらっしゃるわけです。つまり、言葉を変えますと、人間の最高の課題はいのちの回復にあるんだ。いのちはあってもなくてもいいようなものではなくて、絶対いのちなんだ。なのにサタンにやられて見事に神殿にこだわり、律法にこだわり、イスラエルという自負を持っているにも関わらず、いのちが全部抜けているということを見てイエス様は怒りを露わにしていたわけです。いのちの回復が絶対であり、最高の課題であり、一番大切なポイントになります。例えば、私たちがいのちがないのに善人になった。善人になれないのですが、人間の評価であの人、すごい優しい人、立派な人間になったとしても、いのちがなければなんとむなしでしょうか。健康にこだわり、健康を保って元気に長生きしたとしましょう。しかし、そこにいのちがなければ、それが何の益になるのでしょうか。金持ちになりました。成功を収めました。世の中がどんどん発展して行きます。しかし、そこにいのちがなければ、すべてがカレーのないカレーライスと同じなのです。大学に行っても、国会に行っても、皆さんの親もこの話は教えてくれません。聖書の他にはありません。だから、教会に来て礼拝を捧げてメッセージを聞くことにいのちをかけないといけません。牧師が言葉が達者なのか、面白い話をするのか、言葉の前後が合うのかどうかということに気にしないで、神の御声を聞こうとしないといけません。皆さんが礼拝のときにメッセージを心開いて聞いている瞬間、気づいてるか気づいていないか関係なく、皆さんに刻印されている、皆さん滅ぼす間違った刻印が砕かれている真っ最中なんだということを感じてメッセージに耳を傾けていかないといけません。いのちの回復こそ最高の課題です。

6) ヨハネ14:6、1:12

そのいのちの回復の道はどこにあるのでしょうか。その道はイエス・キリストの他にはありません。ヨハネ14:6「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」。このキリストとして世に来られたイエス様を、ヨハネ1:12「この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」。イエス・キリストを信じて受け入れることがいのちの回復なのです。イエス・キリストを信じることより大切なことはありません。パウロは言いました。このことがわかったその時に、今までパウロがこだわって自慢に思っていたすべてがちりあくと宣言するほどなのです。ダビデも言います。死の影の谷を歩いても。またダニエルも明日死ぬとわかっていながらも、生命が奪われることよりいのちが大切でした。死ぬことよりいのちが大切なのです。クリスチャンの私たちが「なんでうまくいかないの。なんで答えがないの」といろいろ思うかもしれません。皆さんの何かというところにあるわけではなくて、いのちがこれほど絶対だという意識がまだ乏しいのではないのでしょうか。そこにフォーカスを合わせないといけません。そうでないとまた宗教のようにこうすればああすれば、これがあれだと別のところを触るようになります。あるいはクリスチャンでありながらも、何かのせい誰かのせいについていつまで経ってもずっと囚われるようになります。人間の最高の課題はいのちの回復になり、その道はイエス・キリストしかありません。

ん。だからキリスト他にはちりあくたなのです。そして、今のこのメッセージを裏返しますとこのようになります。それが二番目です。

2. いのちを回復すると、全ての祝福が生かされる。

逆にイエス・キリストを信じていのちを回復すると、今までいのちが抜けていて、葉っぱばかり残っていた、何の益にもならないものが全部生かされることとなります。いのちを回復することで、すべての祝福が生かされるようになります。

1) イスラエルの祝福-新しいイスラエル

つまり、イスラエルというのは祝福なのです。なのにいのちが抜けていたので、イスラエルというのは、いちじくの木のようにのろわれるような対象になってしまいました。けれども、そこにいのちを回復すると、新しいイスラエルとして生まれ変わるようになります。それが初代教会の120人が集まって、マルコのタラップンでお祈りを捧げていた、そこからスタートしたものなのです。しかし「あれは異端だろう。あれはみなもうすぐつぶれるだろう」と言っていました。社会の下っ端をくぐる人間ばかり集まっていたので。けれども、いのちを回復したその群れはイスラエルの祝福を回復するようになります。イスラエルの祝福は何でしょうか。あなたを通してすべての民族が祝福されるよというイスラエルの祝福がいのちの回復によって生かされることとなります。イエス・キリストを信じることはすごいことなのです。

2) 3つの祭りの祝福-救いと永遠の希望と御座の力

過越しの祭り、五旬節の祭り、収穫祭。形式だけが残っていて逆にいのちの祝福を邪魔するものでした。しかし、いのちの祝福を回復すると、その祭りの祝福が全部生かされます。それで初代教会に五旬節の日になって御座の力が注がれるようになりました。具体的に生かされるようになります。過越しの祭り。それが救いの完璧な祝福として生かされて、収穫祭は永遠の希望として生かされて、その完璧な救いを得られた神の民が永遠の希望に向かって歩いているうちに、五旬節の祝福、御座の力によって勝利できるし、証人として用いられることになるというふうに、いのちあるものに全部が生かされるようになります。いのちの回復はすべてを生かすものになります。

3) 過去-土台、現在-旅程、未来-契約成就

私たちの過去は傷として残っていました。いのちがそこに入りますと、その傷は消えて、過去は土台に変わります。今現在はさまざまな葛藤の連続です。しかし、いのちの祝福7によって葛藤が消えて今現在の現実のすべては旅程なのです。生かされます。未来は不透明で不安なものでした。その不安が消えて、未来に対していのちが入りますと、未来は契約の成就の時刻表なのです。このようにいのちを回復することですべてが回復するようになります。

4) 本業と副業、家庭、教会、現場

先週、先々週でしょうか、申し上げましたように、いのちを回復すると、今まで本業だと思って本腰を入れていたものが副業に変わり、本業は宣教師になります。ここにいらっしゃる皆さん、レムナントの皆さんもいのちを回復しているはずなのに、そのいのちが絶対というふうに意識でき、それが刻印されていないので、本業は本業のまま、副業がずっと本業なのです。私たちの本業は宣教師なのです。短い一回限りの人生。最近、人生百年の時代と言われていますが、百歳まで生きる人はそんなにいません。長ければ80歳まで90歳まで。短いのです。何のために、何を理由にして生きるのでしょうか。教会に通ってる信者なのに、特にタラップンの教会なのに、本業がいまだに宣教師ではありません。主婦が本業ではありません。社長も弁護士も音楽家も本業ではありません。いのちの祝福を本当に回復すると、本業を回復するようになります。だから副業も生かされます。本業のための副業なので、聖なるものになるのです。でも縛られることなどはありません。オリンピックに出るために十年以上努力して頑張ってやっと出れるようになったのに、交通事故によって足を切るしかなくなった。その人はすべてが崩れて人生絶望でしょう。なぜならそれが本業なので。クリスチャンは宣教師が本業なので、足があらうがなかろうが、宣教師の本業には何の支障もありません。代わりもありません。だから自由なのです。これにならないと結局は社会に出て引きずられるようになるしかないのではないのでしょうか。それから、いのちを回復することで、今ま

で家庭内で葛藤だらけだったものが家庭を生かすようになり、教会に献身するものになり、教会がどれほど大事なかがわかるようになり、現場においていよいよ現場宣教師として立たされることになります。いのちを回復すると。いのちが絶対いのちになれば。ぜひ神の御声が皆さんのたましいに聞こえて、いのちではなく絶対いのちという言葉が刻印されるように。子どもの場合に、長男が生まれて、その次が生まれて、また次が生まれると、どうしても手が一番最後のほうに行くでしょう。二番目は必ず拗ねるので。だから、子どもだから罪がないというのはほとんどないことです。生まれながら創世記3章、自己中心なのです。ちょっとだけ末っ子の方に目が行くと、それに嫉妬して暴れるわけです。だから小さいときから親の愛が大事ではなくて、神の愛が大事なんだと徹底的に植えないとはいけません。もちろん親は大切です。たとえ親が思い通りでなくても、周りの友だちが思い通りでなくても、それで揺れるような人間はこれから成功は無理なのです。極端に申し上げると、どうでもいいのです。そうならないといけません。どうでもいいというのは無視という意味とは違います。彼らを愛して憐れむ側に立つことです。何かを求める側ではなくて。いのちの祝福あればそれが可能なのです。いのちというのは神様がいつまでも裏切ることなく私を愛して、私とともにおられるということなのです。何がそんなに傷なのでしょう。何がそんなに気に入らないのでしょうか。何がそんなに心を暗くして皆さんの心を閉じ込めて閉ざさせるのでしょうか。全部悪魔の嘘なのです。いのちが回復されていないからです。いのちは光です。この間も申し上げましたように、光が入って皆さんの中にあるサタンが生えさせた霊的なカビ、心のカビが消えてなくなるはいけません。いのちを回復すると、すべての祝福が全部生かされるようになるということを感じましょう。だから、いのちの祝福にこだわりましょう。

3. いのちの祈りは、死んでいる現場を生かす権威になる。

最後に、ペテロがいちじくの木が枯れましたと驚いて言ったときに、神を信じなさい。祈るものにはこんなすごいことが起こるよ。言ったらもう答えられたと先に信じなさいとおっしゃっている内容は何かという、いのちあるものの祈りは、今いのちの話ですから、神がともにおられ、その御座の力を味わうことができるいのちの祈りは死んでいる現場を生かす権威があります。そういう意味です。

1) マルコ 9:29、ヨハネ 16:24、マルコ 16:17-18

聖書箇所を読みます。マルコ 9:29「すると、イエスは言われた。「この種のもの、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません」。祈りと言われたときに、みなさんがイメージしている祈りではなくて、いのちの祈りです。イエス・キリストの御名による祈り。悪魔のしわざを打ち壊して勝利されて、十字架ですべてを完了したと宣言された万軍の主イエス・キリストの御名により祈る、御座の祝福をこじ開ける鍵となるイエス・キリストの御名によって祈ることです。ヨハネ 16:24「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです」。マルコ 16:17-18「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んででも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます」。祈るものが「あの山が動いて向こうに行きなさい」と言うと、その通りになるよとイエス様がおっしゃいました。実際、そうなるのでしょうか。そういう意味ではありません。もちろん必要であればなるでしょうけれども。死んでいる現場を、悪霊に制せられている現場を生かす権威として現れます。いのちがない場合は、いちじくの木のように枯れてしまいます。しかし、いのちあるお前たちには、このような権威が許されているという意味としておっしゃいました。

2) II コリント 4:7、ヤコブ 5:16

II コリント 4:7「私たちは、この宝を、土の器の中に入れておくのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです」。いのちによって神の力が現れます。ヤコブ 5:16「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります」とおっしゃいました。

3) 愛と赦しを前提とする人生-生かす人生

そして、最後にイエス様がそれと関係のないような話も付け加えておっしゃっています。関係ない話では

ありません。いのちあるものの祈りは、自分の何かのために、魅せつけるために力を発揮するものではなくて、いのちを生かすためなのです。いのちが絶対なのです。なので、そのいのちを絶対にするのと愛と赦しが大前提にならなければなりません。そうでしょう。その人のいのちを大前提に。いのちの回復が絶対という契約を握っているとすれば、相手が悪者であろうが良い者であろうが、そういうことに振り回されることなどありません。是々非々にそんなにこだわることなどありません。絶対いのちであるがゆえに愛と赦しが大前提になる人生をこれから生きて行くようになります。神様はプーチン大統領を愛していらっしゃるのでしょうか。私は愛していらっしゃると思います。彼が知らないだけで、私たちはその目で見ないといけません。となると、その人に対してアプローチが変わるのではないのでしょうか。そのときの祈りなのです。祈るようになるでしょう。みなさんが一番気に入らない者。場合によってはあの人を殺したいなと思う人がいるかもしれません。なぜでしょうか。いのちが絶対になっていないから、皆さんの内側にいのちが豊かになっていないからです。このいのちを一番に見てないからです。となると、ルール、戒めというものは一つしかありません。愛しなさい。私たちがイメージしている愛とは違います。到底、愛せない者なのに神が愛していらっしゃるから愛するわけです。それ以外の理由はありません。北朝鮮のトップの人。いつもミサイルばかり打ちまくって脅かしている人。神様はそういう人間を愛していらっしゃるのでしょうか。私は愛していると思います。地球のすべての人を神様は愛していらっしゃると思います。ただ救われかどうかは私たちにはわかりません。愛のほかに許されているルールはありません。だから、赦すことの他に方法がありません。赦さないとそこに愛は消えてしまうから。私たちの実力では到底無理です。だからいのちの祝福で豊かに豊になること、御座の祝福で皆さんの思い、考え、心、脳、たましいが満たされるようになること。だからそれを祈るわけです。いのちの祈りは死んでいる現場を生かす権威になります。

ぜひ、皆さんの現場に永遠のいのちに定められているたましいが必ずいるので、彼らが救われるように祈るクリスチャンになりましょう。できるできないとか、そういうことは考えないで。私は自分でもまだ足りないものなのに...そういうこともこだわらないように。それは別次元、また整えていかないといけません。その整えていくこともいのちのためにです。しかし、ペテロのように金銀は私にはない、私にあるものをあなたにあげよう。私にあるものをあげようとするときに、私がダメでもあげることができるのです。それを信仰と言います。皆さんの人格をあげるのではなくて、私にあるいのち、イエスをあげることで、皆さんが疲れているときでもそれはあげられます。それを信仰と言います。宗教的に律法的にこだわるのがないように。皆さんが整えられるというのは別次元の話です。絶対いのち。この言葉を握ってキリストといのちの祝福より先走ってこだわっているものがあれば、それをなくしましょう。それを Only キリストと言います。そして、どんな状況でもこのいのちの祝福を、私にあるいのちの祝福を味わうことを優先しましょう。正しいか正しくないか、厳しいか優しいか、どうかどうかということにこだわる前に、自分にあるいのちの祝福を、四方八方から苦しめられても私の内側に宝のキリストがいらっしゃるからそのいのちを味わうことを優先して行きましょう。これを Only 神の国と言います。

それから現場を生かすイエス・キリストの御名の権威を信じて、自負を持って祈りましょう。これを Only 聖霊と言います。私たちには神の恵みによりキリスト・イエスを信じて、皆さんがどう思っているかが、今の現実、皆さんのレベルがどうであろうが、どういう問題を抱えているかが、皆さんはいのちある祝福の神の子どもなのです。忘れないように。だから他のことを先にこだわる前に、いのちの祝福が何かをよく黙想して、それを味わうことを優先しましょう。だから三位一体の神様が私の内側で働いて御座の祝福に満たされるように。そうすると現場を生かす祈りが始まるようになります。

改めていのちある皆さん、おめでとうございます。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。いちじくの実の時期でないのに実がないことでのろわれたいちじくの木、イスラエルを見ながら、いのちが絶対であることを改めて確認して、キリスト・イエスを通していのちあるものになっていることを感謝し、他のことに惑わされることなく、いのちを感謝して、

いのちの祝福を味わうことを優先して、いのちを生かす現場宣教師として残りの生涯を生きていけるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン